

## 第3部

講師・企画者の横顔

## The 3<sup>rd</sup> Chapter

Profile of Program Designer  
Instructor & Program Coordinators

## Parte 3

Perfil do Instrutor & Coordenadores



名 前： ジョン ライアンドウモビッチ (Jon Ryan Dujmovich)

年 齢： 42歳

国 籍： カナダ

ルーツ： クロアチア、スウェーデン、イタリア、フランス、北米先住民

講師

私は、多文化社会の中の多文化家庭で育ってきました。その中で、多文化生活におけるメリット、デメリットを直接感じてきました。幼少期は、さまざまな人種、それぞれの文化背景を持つ子どもたちと常に一緒に遊んでいました。その子どもたちが、カナダ人であるのかそうでないのかなど気にしたことは一度もありませんでした。彼らはただ単に、私の友達、クラスメイト、ご近所さん、または見知らぬ人という認識でした。みんなと一緒に遊び生活をし、穏やかな日々でした。

ある程度の年を重ねた今、私は日本人の妻と美しい2人の子どもたちと浜松で生活しています。その中で、ふと思うことがあります。それは、この子どもたちがどんな幼少期を過ごすのだろうかということです。はたして彼らは幸せだと感じるであろうか？ 他人は彼らに公平な接し方をするだろうか？ 私と同じような多文化の経験が出来るであろうか？ 誰もがわが子に願うように、私も子どもたちが、寛容で愛に溢れた思いやりのある環境の中で育ち、生まれ持った境遇について自信と誇りを持ってもらいたいと思っています。日本のバックグラウンドだけでなく、私側から受け継いだものについてもです。これは、両親のそれぞれの文化に深く関わりながら子育てをしている、私たちのような家族が直面する課題であります。

日々の生活の中で、私の子どもたちはよく「ハーフ」をいう呼び方をされます。この呼ばれ方に対し、好感はもてません。ハーフという言葉を使っている人たちは、特に自分が人を傷つけているという意識はないでしょうが、実際のところ傷つけてしまっているのです。なぜ「ハーフ」と呼ばれることに対し不快を感じるかというと、ハーフとは半分とうい意味であり、そう呼ばれている人は完全ではない、または、なにか欠けているものがあるというように解釈できます。両親のそれぞれの国籍(カナダと日本)を考慮して「ダブル」という言い方のほうが良いですが、しかしこれも私の子どもたちを含め、多様な家系歴を持つ多くの子どもたちにはふさわしくありません。なにかもっと適切な呼び名があればとも思いますが、一番望むことはただ単に「日本人」として受け入れられることです。彼らは、まぎれもない日本人なのですから。

現実的に考えて、日本では聞きなれない名字と顔立ちからして、私の子どもたちが将来、なんらかの差別やいじめにあうことがあるのではないかと懸念があります。父親として、子どもたちに万が一の時の対応の教育をしておく必要がありますが、そういったことが起こらないことを切実に願います。

ある日、私が息子を連れて友達が集まっているところに遊びに行った時、ある母親が私の息子を見て「外人のお友達だよ。遊んでおいで。」と、私の息子を見てその子の背中を押しながら言っているのを聞き、私は少し怒りを感じました。なぜ、あの母親はあんな風に言う必要があったのだろうか？ 彼女の子どもが日本人であると全く同じように、私の息子も日本人です。私の息子は、浜松出身の母親のもと、浜松に生まれ、浜松以外のどこにも住んだことはありません。あの母親は、なぜ私の息子が日本人ではないと思ったのでしょうか？ 名前が違うからだろうか？ 顔立ちからか？ 父親が日本人ではないからだろうか？ 考えれば考えるほど悲しくなり、浜松市が実際に多文化を受け入れ共存できる場所になるまで、また、見た目が違うからといって単純に「よそ者」としてみなされないようになるまでには、長い道のりであると感じました。

多文化教育ファシリテーター養成プログラムへの協力要請があった時、私は「ぜひ」と即答しました。すべての人を受容し、敬愛し、思いやりのある地域社会を創りあげるには、人々の意識を向上させるため、本プログラムのような指導と講座が必要です。さまざまな経験談を読むこと、本誌に書かれている内容を実践することで、そこで生活する市民全員が誇りを持てる多文化社会に一歩ずつ近づくことができるでしょう。(原文:英語)



名 前： リサ キクヤマ

年 齢： 34歳

国 籍： 日本

ルーツ： 日本

プログラム コーディネーター

柔軟性と適応力の両方が外国での生活を成功させるために決定的に重要なことです。私は多文化の国、ブラジルに生まれました。ブラジルには多くの日系人がおり、私は彼らと同様に日本人と呼ばれていました。

両親は、私に、自分のルーツである日本や日本語についてもっと学んでもらいたいと思っており、私は小学校6年生の時に日本の小学校に転入しました。しかし、日本語を十分に話すことができなかつたため、仲間外れになってしまいました。日本の学校では、多くの同級生からアマゾンのことばかりについて質問されたのを覚えています。しかし、私の住んでいたところからアマゾンへは飛行機で約4時間かかり、行ったこともなかつたのでアマゾンについて私が知っていることは、本から得た知識のみでした。ブラジルと言えばアマゾンと決めつけられて悲しかったのを覚えています。皮肉なことに、数ヶ月後ブラジルに戻った後、アマゾンについて聞いた際に、私は日本での苦い経験を思い出すことになりました。

外国人に対してステレオタイプを持つのはごく普通のことです。ブラジルでは、日本人は生まれつき頭がいい、というステレオタイプがあります。私は日本にルーツがあつたので、頭がよくて日本語も流ちょうに話すと思われていました。

1980年代に日本が世界で2番目に影響力のある国になると、ブラジル人の教師は、日本が世界で一番影響力を持つ可能性を考えて、英語ではなく日本語を勉強するべきだと冗談を言いました。その影響もあり、ブラジル人の友人は日本語に興味を持ち、私によく日本語を書いてほしいと頼んできました。それはお決まりのフレーズで「私は君を愛している」でした。私は日本語を書くのは実は苦手でしたが、このフレーズだけはすらすらと書く事ができました。

当時、私はコンピュータが苦手だったので、コンピュータについての塾に通っていました。授業の最初の日、ブラジル人の教師が私を指さして、日本人は技術的に優れているから、私はコンピュータが得意に違いない、と言いました。私は教室の後ろにすわっていましたが、クラスの全員が振り返って私を見たのを今でもはっきり覚えています。これは私にとって大きなプレッシャーでした。

ステレオタイプというのは非常に扱いが難しい問題です。ほんの些細な情報や大衆メディアからの情報によって、どの国の人々もある一定の文化的な型にはめて見てしまうものです。でも、時にはステレオタイプを押し付けられることによって、それが脅迫概念のようになり、自分のアイデンティティを侵食する危険もあるのです。

私は、両親が異なる文化に触れさせ、違う言語を学ぶ機会を与えてくれたことに感謝しています。もし私が母親になったとしても、やはり様々なバックグラウンドを持った人々にできるだけ多く会わせる機会を作りたいと思っています。様々な人に会えば会うほど、私たちの人生において多文化的なセンスを持つ重要性をより自覚するものです。多様化の進んだ現在、世界中どこに行っても文化的に豊かな人はどこでも共生して暮らすための基礎を身につけていると信じています。

(原文:ポルトガル語)